

2017年9月 今年もお盆を終えて

8月の御盆の最中、「よみうり寸評」にこんな記事が載せられていました。

お盆に色とりどりの花を供える風習は「盆花」と呼ばれる。

ぼんばな。その言葉を初めて教わったのは祖母だったように記憶している。

代表的なものはオミナエシ、カルカヤ、ヒャクニチソウ、ミソハギ、各地で盆花に使う草花を数えると、20数種に及ぶそうである。

昔はお盆の前にわざわざ野や山に入り、これらの植物を集めたという。

愛らしい花々が亡くなった人の霊を慰めることは言うまでもない。野や山は花屋に変わったとしても、家族のいたわりを感じさせる風習である。帰省中の方は今まさに、ふるさとの土地ならではの盆花のあしらいを眺める人もおいでだろう。とありました。

お盆にオガラ（麻殻）で迎え火、送り火、茄子に差し込んでお迎えに行く牛を作り、キュウーリに足を作ってお馬さんを作る。太いところでお仏壇に上がる梯子を作ってお盆を迎える用意を8月7日の7日盆より始める。

店に立っていて思うことは、京都の【五山の送り火】のような行事ごとには、沢山の方の関心はあるように思います。しかし上記に書かれているようなお盆を迎える風習がどんどん薄れていくような気がして非常にさみしく、残念な気がしてならないのです。

大木や大きい石、奥深い山、に神さん仏さんが宿るとした農耕民族の自然観。

宗教に関係なく先祖を守り、敬い、時には 家族が揃ってお墓参りをするのもよし。

亡くなった方々を思い、思いだし、心の中で生き続けている多くの人のことを語らう、いい機会でないかと思います。

私の店では、年配の方や病気をなさって、お墓参りに行けない方々に代って墓花代行サービスを行っております。数珠を持ってお参りし、墓花を供えてきます。

そのスタイルを見ておられる方々から、徐々に件数が増えております。

この間も、お盆に入って、忙しくしている最中に、墓花代行に行ってほしい旨の電話が入ってきました（墓花代行サービスの申込期間が済んでいたのですが）。

その方は、自分が墓参りに行けない理由（わけ）を話し始められました。

今年の2月頃より、調子が悪くなり医者に診てもらい、手術し入院していたことを、事細かく説明なさって、今も家で寝たり起きたりの日々を送っていらっしやるとの事。

この間約20～25分。ゆっくりと返事、相槌を打ちながらのことです。

墓花と代行サービス代を含めて1600円のご注文です。

隣で墓花を作っていた息子（貿易の会社を経営しているので、忙しいときだけ手伝っています。）が、「親父も気が長なったなあー。だんだん仏さんに近づいているのと違うか？」とのこと。

京都（実家）の花正は約100年近く続いています。

これも私が今やっているような事の積み重ねをしてきたのではと、最近思うようになって

ております。

近年、少しでも若い人の役に立てないものか？という思いが強くなってきているのは、年齢を重ねてきた証かなと、思っております。少しでも人の気持ちに寄り添うことが出来ればとも思います。

その反面、まだまだ怒りっぽいので、自分を戒めること多々あります。

とこのように感じたお盆でした。

2017年8月22日 西井 忠義